

東日本大震災被災者医療支援活動報告

宮城県仙台市若林区

東京労災病院 呼吸器内科 酒井俊彦

東京労災病院チーム

医師 酒井俊彦

看護師 高松正寛、 鈴木真由美

薬剤師 小西裕二

OT 坂井博之

事務員 富澤竜治

運転手 長尾芸記

(写真 1)

東京労災病院チームは4月18日から4月21日の日程で仙台市若林区において医療支援を行った。我々が活動した期間は、今回の労災病院の医療支援活動が開始されてから1カ月ほど経過してからのものであり、他チームの活動状況を事前に把握することができた。そのためある程度の予備知識を持って活動することができた。現地ではかなり復興が進んでおり、ライフラインは概ね復旧されていること、診療所、病院などが再開しており、医療的なニーズは当初より減少しつつあること、主に感冒など軽症患者の診察で、加えてメンタルに問題がある患者が増えていることなどが情報として伝わっていた。

平成23年4月18日午前10時、院長はじめ病院職員の見送りの中東京を後にした。

仙台着

六郷中学校体育館で前任の愛媛労災病院チームと待ち合わせた。仙台は4月の下旬にしてはまだまだ寒く、避難所となっている体育館ではストーブがフル稼働していた。その後被災地の荒浜地区を視察した。道中では、所々で道路のアスファルトが割れているところ、電柱が傾いているところ、家がほとんど全壊してしまっているところなど、テレビなどで報道されている悲惨な光景を目の当たりにし、少しずつ皆の空気が沈んでいくのを感じた。さらに浜辺近くまで行き、そこに降り立ち振り返って周囲を見渡すと皆言葉を失った。あまりにも広範囲に、見渡す限り泥と膨大な量のがれきが拡がっており、ここに住居、田畑があったことを想像することは困難であった。これらを元の状態に戻すこと

は果たして可能なのだろうか、と思わざるを得ないほど荒涼とした風景であった。翌日以降、被災者に接する上で、この悲惨な現場をみることなしに彼らの気持ちを理解することはできなかつたであろう。

(写真 2)

東北労災病院にて前任愛媛労災病院チームからの申し送りを受けた。薬剤は、それまで派遣されてきたチームの持ち込みがかなり蓄積されており、不足している薬剤はほとんどないとのことであった。当日小西によって在庫薬剤のリストが作成され、次回以降に派遣されてくるチームの持ち込み薬剤の参考にしていただくよう、当院を通じて報告することとした。

4月19日、4月20日の2日間は避難所の巡回診療を行った。朝9時、若林区役所にて、各避難所に派遣されている保健師とミーティングを行い、連絡事項の聴取、避難所からの要請を聞き当日の活動計画を立てた(写真3)。9か所の避難所の中から依頼要請のあった避難所に赴き診療を行い(写真4)、18時から21時まで若林区体育館で診療を行った。患者は予想された通り、軽症の内科疾患患者が多かった。しかし、一部の、点滴、血液検査などが必要な患者に対しては近隣の病院、診療所などに紹介をした。4月20日、夜、後任の燕労災病院チームに引き継ぎを行い、4月21日、東北労災病院スタッフの方に見送られ仙台を後にした。

- ① ノロウイルス感染症が発生した避難所があり感染拡大防止策に苦慮した。避難所は個室が限られており、感染確定者がこれ以上増えたら収拾がつかない事態になりかねないと思われた。避難所を運営する組織が十分整備されていないこと、スタッフも多くは交代制で全貌が把握できておらず指示、命令が徹底しないこと、生活の場である避難所内での移動や生活上の制約を行うことが、病院と比較すると非常に困難であることが、問題解決を難しくしていると思われた。
- ② 在住スタッフの方々、ボランティアの方々の多くが肉体的、精神的な疲労が蓄積されているように感じられた。現地の医療機関も再開していると聞くが、患者の数も多くなっているであろうし、患者は様々な合併症を併発していることも予想される。また薬剤などの物品も不足しているかもしれない、そしてなにより医療従事者自身が被災者の可能性もある。我々はほんの短期間しか現場に関わることができないが、医療支援を通じて彼らの精神的その他の負担を少しでも軽減することができればと思う。

- ③ 事前の報告以上に、メンタル面での問題を抱えた患者が増えていると感じた。同じ避難所を全く別組織の「心のケアチーム」が巡回しており、連携を図ろうと試みたが短期間では不可能であった。合同カンファレンスを行うなどして情報交換を行うことでより効率的な診療活動ができると思われた。
- ④ 避難所派遣保健師から依頼のあったところを中心に巡回していたが、看護師の提案で依頼のない避難所にもこちらから積極的に巡回することとした。実際に行ってみて声をかけると、相談を含めて受診希望者は多く、中には喘息の小発作を発症している方もいた。災害後の精神状態、周囲の生活環境の問題などもろもろから自分の体のことは後回しになっているのかもしれない。この意味からも避難所を巡回し積極的に声をかけることは必要であったと思う。

写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

